鈴木商店の台湾進出と現在の台湾事業
～楠・樟脳から洋上風力へ

鈴木商店の金子直吉は、鈴木商店とほぼ同時期の明治10（1877）年に創業した神戸の後藤回漕店の縁により、台湾総督府後藤新平との知遇を得て、樟脳油の販売権を取得し、その後、鈴木商店は台湾での事業の多角化を行っていく。特に砂糖分野では、台湾五大製糖のうち、東洋製糖、塩水港製糖と資本関係を構築し、また、大日本製糖の原糖も取り扱い、台湾産原糖の3分の1を取り扱うなど大きなシェアを誇った。

大蔵省専売局とは樟脳以外に塩を取り扱い、内地への塩の販売を鈴木商店が出資する大日本塩業（現・日塩）が取り扱った。その他にも発電、石炭、木材、不動産開発など多岐にわたる事業を展開した。大正5（1916）年の台湾勧業共進会の写真が現在でも残っており、鈴木商店の当時の盛隆を垣間見ることができる。

台湾勧業共進会の鈴木商店のパビリオン。右側のオブジェは鈴木商店が製造販売するサクラビール

鈴木商店台湾懇親会（大正6（1917）年、北投にて）。右上は鈴木よね

IHI相生事業所（旧・播磨造船所）に現存する鈴木商店時代の倉庫上部の米星

1981年に日商岩井・台北支店が発足するまでの24年間は、台湾の取引は、米星商事（べいせい）の名で行っていた。米星とは鈴木商店の社章にもなっており、鈴木よねの「よね」を米とし、星の形に似ていることから米星（よねぼし）といわれた。

現在の双日は、液晶などの電材、各種化学品、触媒などの工業用資機材、そして電気銅などの非鉄金属を中心とした取引を行い、2019年には、台湾最大級の洋上風力発電事業（640MW）に参画を発表、今後長期にわたり電力を供給することになる。

台湾の天然資源を活用した樟脳事業から始まった双日の台湾ビジネスは、今、台湾の自然エネルギーを活かしたクリーンな事業に挑もうとしている。

台湾最大級の洋上風力発電事業に参画（2019年）
（copyright of and with permission by Yunneng Wind Power Co., Ltd.）